

平成30年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成 31年 3月 27日

報告者	学科名	造形デザイン学科	職名	教授	氏名	野宮謙吾
研究課題	竹久夢二の筆跡をテーマとした書体デザインの研究1～筆跡資料の調査・分析及び試作～					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	野宮 謙吾	造形デザイン学科・教授	タイポグラフィ	統括、調査、分析・試作制作（タイポグラフィの視点から）	
	分担者	柴田 奈美 風早 由佳	造形デザイン学科・教授 造形デザイン学科・准教授	日本文学 英米文学	調査、分析、評価（日本文学の視点から） 調査、分析、評価（文学・夢二学会准会員の視点から）	
研究実績の概要	<p>1 直筆文字の調査</p> <p>昨年度、夢二郷土美術館の協力により筆跡資料の提供を受けたが、更に原稿用紙への自筆資料の保存状況及び資料提供の可能性を確認するため、夢二関係の美術館等について調査した。また、時代と仮名書体との関係性、組方向による仮名書体の制御手法について資料収集した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・竹久夢二美術館（東京都文京区弥生）8月 ・大正浪漫 グラフィックデザイナーの原点 竹久夢二展（明石市立文化博物館）1月 ・京都 ddd ギャラリー第219回企画展 組版造形 白井敬尚 2月 <p>2 筆跡の分析</p> <p>発表を前提としない表現であるため、判読困難な文字がある可能性が予測された。そのため書き下し文が存在し照合可能な資料として、「ベルリン日記」（昭和7年(1932)11月～昭和8(1933)年4月頃、縦書き、鉛筆）を選択した。採字した平仮名は47音、計1,048字である。特に判読困難であった文字に関し字体／骨格の観点より分析した結果、以下の理由によるものと考察した。</p> <p>「き」字体：支の変体仮名に近い 「た」字体：堂の変体仮名に近い 「に」字体：尔の変体仮名（明治43年の絵手紙では一文に現字体と混在が見られる） 「る」骨格：始筆が独特である 「れ」字体／骨格：該当する変体仮名は発見できず独特のくずし字と推察される（明治44年の絵手紙では判読できる字体である）</p>					

※ 次ページに続く

研究実績
の概要

3 骨格抽出

採字した平仮名より、

- ・判読性が確保されながらも特徴的であること
- ・書体への展開に際し比率調整を避けるため、正方形に対し収まりがよいことを条件とし、各文字2～4文字に絞り込んだ。

骨格抽出の手順は以下のとおりである。

- (1) 40×40mmの字面（実ボディ）を設定
- (2) 採字した平仮名の中心線を2ポイントのラインでトレースし骨格を抽出
- (3) 各文字1種に絞り込み
- (4) 五十音一覧の作成

4 書体の試作

抽出した骨格に対し、エレメントの付加及び各部調整を行い書体開発に向けた基礎要件を整えた。

エレメントについては、筆文字との差別化を図るため抑揚を付けず一定の線幅とした。始筆及び終筆の処理についても本研究では省略した。

また、直筆資料における文章組を参照の上、各文字について字面と仮想ボディの比率調整を行った。

5 おわりに

直筆原稿の筆跡分析により、夢二の書く平仮名における字形の特徴を明らかにした。そして、これを骨格とする平仮名書体の原型を試作した。

しかし、夢二の筆跡は時期により字体あるいは骨格の差異が認められる。従って、本研究で採択した晩年の時期に近いベルリン日記の筆跡をもって、夢二の代表的な筆跡と判断できるかについては疑問が残る。

また、本研究では書体への展開を想定し正方形への収まりを絞り込みの条件に設定したが、逆に、夢二の筆跡の魅力を表現するためには平仮名本来のプロポーションな字幅を活かす方法が適している可能性がある。

今後においては、上記課題の検討に加えて、始終筆の形状、拗音促音等の字形及び組み合わせる漢字書体、更に評価の手法について検討する計画である。